第二十八回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー

新宗教と平和運動

――大本・人類愛善会の活動を事例に――

永岡　崇

はじめに――中濃教篤師と大本・人類愛善会の平和運動

永岡と申します。よろしくお願いいたします。私の報告では、日本を代表する新宗教のひとつである大本の平和運動をとりあげたいと思います。一九四〇年代末から六〇年代前半にかけて、世界連邦運動・原水禁運動を積極的に展開した教団であり、戦後宗教者の平和運動を考えるうえで外すことのできない存在です。とはいえ、大本のことをあまりご存じでない方もおられるかもしれませんので、簡単に紹介しておきます。一八九二年、京都府綾部の貧民・出口なおの神がかりによって開教された宗教で、なおは筆先という自動筆記の著作を膨大に残しました。その後、霊学・霊術を得意とする上田喜三郎、のちの出口王仁三郎が加入し、大正期には筆先に基づく立替え立直し（＝終末主義的な教義）と鎮魂帰神法（神がかり行法）が注目され、最初の発展期を迎えます。しかし官憲の警戒を招き、王仁三郎らが不敬罪などで検挙される、第一次大本事件が起こりました。事件後、人類愛善会という外郭団体を立ち上げて国際宗教提携、エスペラント語普及運動などを展開する一方で、満洲事変後は農村救済・天皇機関説排撃・軍縮条約破棄などを掲げる昭和神聖会運動も行っていくのですが、一九三五年、不敬罪・治安維持法違反などで大検挙され、

一九四五年の敗戦まで活動を停止させられてしまう。しかし戦後に復活して、一九六〇年代の前半まで平和運動の先鋭的な担い手として活動していくことになります。日本（皇道）主義・アジア主義・国際主義を混淆させた複雑な運動の軌跡を描いた宗教運動です。[1]

大本は中濃教篤師と直接的な関係が深かったとはいえませんが、いくつかの点において間接的なつながりを指摘することができます。第一に、中濃師が中心的な役割を果たした日本宗教者平和協議会に、大本も結成当初から参加していました。こうした宗教間の協調・連携を大切にしながら大本独自の平和運動を展開していったということで、彼らの軌跡から宗教と社会運動の関係の多様性を理解することができるのではないかと思います。

第二に、アジアとのつながりです。坂井田さんのご報告でのべられたように、中濃師は中国仏教協会の趙樸初らとの交流をはじめ、宗教間の国際交流にもとづく平和構築の道を探っておられました。それは大本が戦前期以来標榜してきたアジア主義と一脈通じるところがあり、その歴史的意味を探るうえでも重要な事例だといえます。

第三に指摘したいのは、実践的平和論の問題です。中濃師はある論考で、口に平和を唱えながら実質的には政治権力に迎合する仏教「中道」論を批判し、日本山妙法寺の藤井日達が提起する絶対平和主義の支持を表明しておられます。「〔藤井〕師の場合は、宗教的「絶対平和主義」「非暴力主義」が、これまで一般的にそうであったように「喧嘩両成敗」論の段階にとどまるのではなく、民族解放闘争のもつ真の意味の重要性を肯定する内容にまでふくらんでいる」[2]と評価し、宗教者の社会運動に共通するジレンマというべき「政治と宗教」の関係を深く掘り下げて考えていました。これからとりあげる一九六〇年代の大本には、まさにこの「政治と宗教」の問題が凝縮されていたということができ、たんなる一新宗教教団の事例というにとどまらない一般的意味を引き出しうるのではないか、という見通しを私はもっています。

大本の平和運動を考えるうえで、強調しておきたいのが戦前と戦後を繋ぐ視点の重要性です。まずは、亀岡の大本

本部で行われた第二回世界連邦アジア会議で、牧野虎次という人が話したことを引用してみました。「この度のアジア会議が、東京で始つて亀岡で終るということは、まことに意味深長であると存じます。この大本の主唱者であられる出口聖師は今から三十年程前から人類愛と、世界平和を叫びつゞけておられたのであります。それがためにかつては、非常な弾圧と迫害を受け、多くの宗教の開祖が受けられた法難の経験もなめられたのであります。聖師のみならず、この傍で議長を勤めておられる出口〔伊佐男〕総長もまたそのほかの当時の幹部諸君も法難を経験せられた方々であります。この亀岡の地こそ、おそらく地球上において人類愛と世界平和を叫び出すもつともふさわしい聖地の一つであると存じます[3]」。

この牧野というのはイェール大学神学校出身のキリスト者で、戦時期に同志社総長を務めたほか、社会事業家としても知られる人物です。彼のことばの要点を確認してみますと、①大本は一九二五年に人類愛善会を創立、「人類愛善」と「諸教同根」を提唱した。②一九三五年に政府の弾圧を受けて教団が壊滅させられた。③戦後、戦前の伝統を継承して平和運動を展開している。ということで、宗教者平和運動を戦前から一貫して展開してきた教団という語りであるわけです。

しかし、これから述べるとおり、実際にはさまざまな屈折があり、そう単純に語れるわけではありませんでした。戦後の大本・人類愛善会が戦前期のそれを引き継いでいるのだとすれば、王仁三郎の多様な思想・実践のなかのどの部分を継承し、どの部分を否定しているのか、を考えなければならない。戦後の宗教者平和運動を考えるときには、彼ら自身の戦前の運動との連続／断絶を考えないと、リアリティのある問いにならないというのが、今日の話のひとつのポイントです。そしてそれは、中濃師が『天皇制国家と植民地伝道』（一九七六年）などで取り組んだ問題でもあると思います。

1．大本の戦後再発足と世界連邦運動への参画

それでは本題に入ります。さきほどお話ししましたように、一九三五年から敗戦までの一〇年間、大本は政府の弾圧によって組織的活動をストップさせられていましたが、敗戦により第二次大本事件が解決して「愛善苑」の名で再発足しました。「愛善苑設立趣意書」では、「万教同根」と「人類愛善」を旗印として「世界の恒久平和に貢献せん」とすると謳い、一九二〇年代の人類愛善会の理念を継承していこうとしました。[4] その理念に向けて大本が具体的に動いていく契機となったのが、世界連邦運動との出会いでした。世界連邦運動の直接的な起源は、H・G・ウェルズが『世界文化史大系』で展開した「世界政府」構想だとされ、第二次大戦後に世界連邦主義の組織的運動が活発化していきました。日本では敗戦後すぐに賀川豊彦の国際平和協会と、徳川義親の恒久平和研究所が発足し、やがて世界連邦建設同盟へと展開します。そして五〇年代に入ると、京都府綾部市の世界連邦都市宣言や第一回世界連邦アジア会議、宗教世界会議の開催など、日本における世界連邦運動は最高潮を迎えています。[5]

ただ、社会運動史のなかで、世界連邦運動はかならずしも高い評価を受けていません。道場親信という研究者のコメントをあげてみますと、「〝大国支配〟と独自の強制力不在、という国連による安全保障の問題点をするどく衝いていた」が、運動じたいは戦前の無産運動右派の政治家から革新貴族・保守政治家までがふくまれた「「左」「右」の奇妙な混合体」であり、結局のところ「知識人・政治家を看板に立てたキャンペーン的運動を越えず、六〇年代初頭に安保問題が「反戦平和」の主要な論題になっていくに従って衰退していったものと考えられる」とあって、けっこう手厳しい。[6] しかし、世界連邦運動の限界という話に一気にもっていくのではなく、この「奇妙な混合体」と大本・人類愛善会との合流と葛藤がもつ意味はなにか、ということを考えてみたいと思うわけです。

一九四九年、世界連邦建設同盟の大橋松太郎が愛善苑を訪問、教主出口すみらと「夜を徹して世界連邦運動に就い

て歓談し」、すみは「大いに本運動の進展に期待されるものがあつた」とされています。[7] その後教団では第二次大本事件以来活動停止していた人類愛善会を再発足させ、運動への参加を決定しました。

大本の世界連邦運動参加に際して重要な意味をもったのが、出口なおが明治二十六年に書いたとされる「お照しは一体、七王も八王も王が世界に在れば、此世に口舌が絶えんから、日本の神国の一つの王で治める経綸が致してあるぞよ。[8]」という筆先です。「日本の神国の」を取り、「王」を「主権」と読み替えれば、世界連邦の予言になるということで、運動参加の教義的根拠とされていきました。ただ、この筆先は戦前の大本では異なった意味をもっていました。たとえば出口王仁三郎による綱領的文献「大正維新に就て」では、「開祖刀自の神諭に、七王も八王も王があれば世界の苦舌が絶えぬから、神が表面に現はれて戦ひで世を還へして、神の血筋の一つで王を治めるぞよ云々とあるを見ても、万世一系の天皇の享有し給ふ世界的主　師　親の三大権を発揮し給ふべき時機の到来せる事は火を睹るよりも明らかな事実である[9]」と語られています。つまり、天皇崇拝を押し立てた（道義的）世界統一思想として解釈されていたわけです。大本・世界連邦運動の両義的性格を象徴する筆先だといえるでしょう。

2. 戦前大本のアジア主義

ここで大本がもつ両義的性格について、戦前に遡って少し確認しておきたいと思います。一九二一年・三五年の二度の大弾圧の間の期間、王仁三郎は目まぐるしい動きのなか、国際主義と国家主義の双方を推進しました。主な項目を拾うと、一九二三年に中国の道院・紅卍字会との提携開始、二四年に「入蒙」と呼ばれる内モンゴル進出の企て、二五年に人類愛善会発足と北京での世界宗教連合会の発足、そして三四年には昭和神聖会発足といったようなものです。国際協調主義にみえるものもあれば超国家主義とみえるものもあって、なかなか尻尾をつかませないのが王仁三郎という人物なんですが、重点の置き方を変えながら日本主義・アジア主義・国際主義を混淆させており、「皇国存

立」をそれらの基盤としていた、としか言いようがないのかもしれません。[10]

今日とくに注目したいのが道院・紅卍字会で、一九二〇年代から三〇年代前半にかけて大本ともっとも親密な関係にあった中国の宗教／慈善団体です。簡単に来歴を確認しますと、一九一六年、山東省済南でフーチと呼ばれる神がかり行法を中心とした宗教運動が発生、二二年、社会団体として北京政府の公認を受け、同年中に満洲地域にも進出。二三年、関東大震災に際して救援物資とともに来日、大本と接触。道院が担う「道徳提唱」と紅卍字会による「慈善実行」を両輪として活動し、「五教合一」を主張する点でも、大本の諸教同根思想との親縁性が強かったといえます。三〇年代前半における満洲地域での大本の勢力拡大は、道院の支援によるところが大きいといわれています。

道院・紅卍字会は第二次大本事件後に大本との提携を断ち切り、以後も「満洲国」の代表的慈善団体として展開を続けましたが、「満洲国」政府に従属的態度を取っていたようです。[11] 弾圧中の動きとして注目されるのが山口利隆です。大本幹部で海軍少佐、三四年に教団の北支特派として活動していた人物で、海軍将校としての地位によるものか、第二次事件では起訴留保処分となり、地元の鳥取で「国体信仰運動」と称して「旧信者」を集め、王仁三郎の保釈請願などを展開しました。山口は三八年に『皇道宣揚と世界紅卍字会』というパンフレットを刊行し、「皇国の惟神の大道と一脈相通ずる」とともに、「人類愛善の実行」「日支一体」「永遠の東洋平和」に資する慈善団体として紅卍字会を称揚しています。[12] 弾圧で提携自体は途切れるものの、山口などとの個人的な繋がりは維持していたのかもしれません。

3．大本・人類愛善運動の展開

戦前期の流れを簡単に確認したところで、戦後平和運動に話を戻します。大本の世界連邦運動の中心となったのは出口伊佐男（一九〇三～一九七三年）、王仁三郎の娘婿で、王仁三郎亡き後の教団実務を担った人です。伊佐男たち

は運動の大きな柱として諸宗教の代表者による世界会議の開催を目標とし、「有形の障壁は世界連邦運動を推進して、それを実現することによって取りのぞくことはできるが、それを建設するためには、無形の障壁、すなわち精神的なそれを除外せねばならない」、だから「私たちが一つの神のもとに統合し、おたがいの親ぼくを深め」るべきだと主張していました。[13] こうした観点から世界連邦アジア会議、宗教世界会議などを人的・金銭的にサポートしていきます。『人類愛善新聞』の一部売りを通じて、個々の信者を「神業」の奉仕者へと主体化させるという手法を取ったのも特徴的です。世界連邦運動は「知識人・政治家を看板に立てたキャンペーン的運動」にすぎないといわれますが、大本・人類愛善会が一般の信者・会員を世界連邦の理念に向けて主体化させ、その「看板」を支えていたことには一定の評価をする必要があるのではないでしょうか。

さて、大本・人類愛善会は世界連邦運動と並行しつつ、第五福竜丸事件を受けて原水禁運動へと進んでいきます。進歩的知識人と交流しながら、署名運動、デモ行進、国際会議出席、学習会開催などを展開し、文化人類学者の梅棹忠夫は「日本におけるもっとも戦闘的な平和主義者の団体であるかもしれない」[14]とまで評していました。

原水禁運動で中心となったのは、王仁三郎の孫娘の婿である出口榮二でした。教団実務のトップである総長職を伊佐男から引き継いで平和運動を推進しました。彼は歴史学者・上原専禄の影響を受けつつ、アジアとの連帯にもとづく実践的な平和運動を志向していきます。彼は「時代を指導せんとする宗教なら、その国の政治や社会のわくの中でうごめいているのでは何の役にもたたない」といい、「大本が民衆の宗教の立場に徹し、大本の御教が世界の人民の心の奥底に通じあい、神の子たる人間の尊厳性と霊性を開顕する現代に生きた宗教である以上、人々の希求する心の安らぎに答え、核戦争への危機を絶やし、平和な世界へと宗教者の良心をもって、もっともっと私達は勇敢に実践的でありたいと念願しないではいられない」と訴えていました。[15] おそらく伊佐男と榮二の間には微妙な差異があるのですが、これについては後で考えたいと思います。

4. 冷戦体制のなかで

宗教界のトップランナーとして平和運動を展開した大本ですが、彼らも冷戦体制のなかに否応なく巻き込まれていきます。当初「保守」「革新」問わぬさまざまな市民の同時多発的な運動として出発した原水禁運動は、一九五〇年代末以降、安保改正やソ連の核実験などをめぐって運動内部の対立が深刻化し、六三年の第九回大会で原水協・原水禁に分裂してしまいます。そのなかで人類愛善会は米・ソの核実験に対する抗議声明を発表する（六一年）など、「いかなる国の原水爆にも反対」の姿勢を打ち出し、運動分裂の六三年には、日本山妙法寺と「平和統一達成」を掲げて長崎―広島間を行脚するなどの行動をとりました。しかし、教団内では、運動の「政治化」にたいする危惧の声も高まっていきます。「大本が安保反対など、そうとう強い線を出して運動を展開したことに対して、ごく一部ではあるが批判する声があるようだ」[16]と、榮二は語っています。

一方、同時期の動きとして、紅卍字会との交流復活があります。第二次国共内戦をへて、道院・紅卍字会が香港・シンガポール・台湾などに拠点を移しますが、五〇年ごろから大本との交流が再開していきます。道院側から教主出口直日・総長出口伊佐男を東瀛道慈副統監に任命、希望する信者にも道名を下賜するなどのアプローチがあったわけです。六二年には日本での拠点として社団法人日本紅卍字会も設立され、戦後の政治的状況、両組織の現状を反映して縮小されつつも、関係回復を志向していきました。大本から道院に向けたメッセージでは「アジア人の人類に対する責務は歴史上、未だ曾つてない、極めて重い比重をもつに至りました。信仰厚き道院の青年各位に吾等はその心衷を訴え、相共に老祖の御旨に応え奉らんために、美しいつながりを持ちたいと希求致します」[17]と呼びかけをしており、大本と道院の「美しいつながり」が世界平和に寄与するという信念が存在していたのだと思います。

一方で原水禁運動、他方で紅卍字会との交流が展開するなか、教団に衝撃を与えたのが出口榮二の訪中でした。一

九六二年七月、榮二は「全般的軍縮と平和のための世界大会」に宗平協代表として参加すべく、モスクワに出発します。この会議はウィーンに本部を置く世界平和協議会が呼びかけ、民衆の世論の力によって世界の政治に影響を与え、平和的共存と軍縮」をめざすものでした。ところがソ連で中国仏教協会の招きを受け、榮二は予定を変更して急きょ訪中し、趙樸初の手引きで周恩来とも会談しました。坂井田さんのご論文によれば、当時趙らは日本の宗教者との交流を深め、反米・核兵器廃絶の運動を支持していましたから、[18] 榮二の訪中もそうした対日交渉の一環なのだと思われます。しかしこの行動が教団内で大問題に発展し、榮二は総長辞任に追い込まれ、対外的にアピールする形での大本の平和運動は終息していくことになります。冷戦の構造が大本の平和運動を引き裂いた、ととりあえずいえますが、問題は、単に大本が外から振り回されただけではなく、彼らが戦前期以来の大本の歴史、また戦後社会とどのように向き合うのか、ということと関わっていたということです。

おわりに――前を向くことと振り返ること

たとえば出口伊佐男の場合、第二次大本事件地裁公判での陳述では「日本ノ天皇陛下カ世界ヲ統一遊バサレマシタラみろく神政ガ成就シタノデアリマス」[19] と語っていましたが、戦後には「極く一二の国を除いては、どこに行つても、日本人に対する悪感情というようなものは、全然無かつたばかりでなく、むしろ日本に非常な期待がかけられている」「われわれは敗戦国だ、世界の事は「あなた任せ」のほかはない、というような卑屈な考えは、神の前には許されない、平和国家として更生せしめられたことに、深き天の使命を感じ、かつては世界を動乱に陥れた罪の償いとしても、平和建設の道を、ただ一筋に、邁進さして頂きたい」[20] とのべるようになります。超国家主義的世界統一から平和建設へと転換し、日本人が果たすべき役割への楽観主義的な自負を表明したのです。

おそらく、こうした主張の背景には過酷な弾圧の経験がかかわっているでしょう。伊佐男は大本事件をつうじて、

「平和なる心の前には、ついに如何なる暴圧も、これに危害を加えることは出来ず、無抵抗主義こそは、最後の勝利者なること」[21]を悟ったといいます。ここでは「暴圧」＝国家権力に対置するかたちで「平和なる心」「無抵抗主義」としての自己像が構築され、大本みずからの対外膨張主義は忘却されています。〝軍部に騙された〟といいながらみずからの加害性を否認する、戦後社会に広くみられた国民的ナラティヴと共振しつつ、弾圧という契機をとおしてそれをさらに純粋化させているわけです。戦前の活動がもった両義性への深刻な反省を欠くゆえに、戦後の運動にもその両義性がそのまま持ち込まれていったのであり、冷戦下のアジア情勢に足をとられざるをえませんでした。

他方、より若い出口榮二の場合、王仁三郎との接触は実質的に第二次事件の保釈以降であり、その時期の発言をもとに王仁三郎の思想を絶対平和主義と理解する一方で、事件前の超国家主義的言説は、「本当の御意図でない」[22]ものとして切り捨てていました。親米勢力への批判的スタンスをとり、中国本土との関係をも重視する点に伊佐男との差異があったといえますが、彼は大本・王仁三郎がもつ複雑性、また第二次事件前の信者たちの皇道主義的信仰には正面から向き合わなかったため、教団内での軋轢を避けることができませんでした。

最後に簡単に話をまとめてみます。戦後大本の平和運動は、一九二〇年代の人類愛善運動を継承して、日本の宗教者平和運動の先頭にたつものでしたが、戦前の運動の複雑性をめぐる批判的総括を欠いたまま、戦後の地政学に巻き込まれていきました。戦後の大本・人類愛善会が王仁三郎の多様な思想・実践のなかのどの部分を継承し、どの部分を否定しているのかが明瞭でなく、教団内外での軋轢は避けられなかったわけです。

また、伊佐男はおそらく自覚的ではなかったと思いますが、アジアの連帯という理念が、大本の平和運動を混迷に導くことになったといえます。榮二もまた、王仁三郎の超国家主義的側面を否認することで、大本に流れる多様な経験・思想をまとめていくことに失敗してしまいました。

したがって、大本の平和運動について考えることの豊かさは、その先端的な実績を称揚することにではなく、戦前

から戦後にかけての歩みに孕まれた複雑さ・困難さに向き合い、「平和」という理念を鍛えなおすことにこそあるのではないでしょうか。

ややこしい話を駆け足でお話ししてしまい、わかりにくい点も多々あったかと存じます。申し訳ありません。ご清聴ありがとうございました。

---

1 井上順孝ほか編『新宗教事典』弘文堂、一九九〇年、参照。
2 中濃教篤『宗教の課題と実践』白石書店、一九八四年、一六四頁。
3 牧野虎次「新世界創造の〝陶物造り〟たらん」『愛善苑』一九五五年一月号、八頁。
4 大本七十年史編纂会編『大本七十年史（下）』宗教法人大本、一九六七年、七三八～七三九頁。
5 田中正明『世界連邦――その思想と運動』平凡社、一九七四年、参照。
6 道場親信『占領と平和――「戦後」という経験』青土社、二〇〇五年、頁。
7 『世界国家』、三巻六号、八頁。
8 『神霊界』大正六年五月号、一頁
9 「大正維新に就て」『神霊界』大正六年三月一日号、九九頁。
10 川村邦光『出口なお・王仁三郎』ミネルヴァ書房、二〇一七年、参照。
11 孫江「宗教結社、権力と植民地支配――「満州国」における宗教結社の統合」『日本研究』二四号、二〇〇二年、参照。
12 山口利隆『皇道宣揚と世界紅卍字会』国体信仰運動事務所、一九三八年、頁。
13 『人類愛善新聞』一九五二年十一月下旬号。
14 梅棹忠夫「日本探検（第二回）綾部・亀岡――大本教と世界連邦」『中央公論』八六七号、一九六〇年、一九二頁。

15 出口榮二『出口榮二選集4』講談社、一九七九年、五〇頁、『出口榮二選集1』講談社、一九七九年、七～八頁。

16 出口榮二、佐藤尊勇、大国以都雄、桜井八州雄、米川清吉、三村光郎「世界経論の鼓動を聴きつつ――今年の大本運動の回顧」『おほもと』一九六〇年一二月号、二一頁。

17 『愛善苑』一九五三年二月号、二～三頁。

18 坂井田夕起子「中華人民共和国の対外工作と仏教――一九五二－一九六六年」石川禎浩編『現代中国文化の深層構造』京都大学人文科学研究所、二〇一五年、参照。

19 池田昭編『大本史料集成Ⅲ 事件篇』三一書房、一九八五年、四八二頁。

20 出口和明編『松のひびき』出口和明、一九七四年、六五頁。

21 出口和明編『松のひびき』出口和明、一九七四年、六二頁。

22 出口栄二、佐藤尊勇、大国以都雄、桜井八州雄、米川清吉、三村光郎「世界経綸の鼓動を聴きつつ――今年の大本運動の回顧」『おほもと』一九六〇年一二月号、二四頁。